

〔報告〕

イギリス南部とロンドンの庭園を訪ねて

Visiting Gardens in London and Other Parts of Southern England

中橋 文夫

NAKASHI Fumio

和文要旨：イギリス庭園は、丘陵地に広がる森林・草原・池などの自然風景を活かした庭園と理解していたが、今日の、イングリッシュガーデンのブームの影響を受け、真相は花で彩られた庭園が多いのではないかと、筆者の考えが変わりつつあった。一方、日本庭園は、自然を縮景にした作庭技法により、多くの伝統庭園が造られてきた。イギリス・日本庭園とも、「自然美」をテーマにした巧みの技が秘められている。これらを明らかにするために、イギリス南部、ロンドンの庭園を巡った。本報告の目的は、訪れた庭園・公園・植物園などの歴史・土地利用・植物の使い方・管理などの知見を深め、その感動、印象を読者の皆様方に伝えることにある。

【キーワード】イギリス式庭園、自然風景、花壇、巨木、ビスタ

Abstract : I used to think of an “English garden” as being a garden that utilizes natural scenery, which may include woodlands covering hilly areas, grasslands, or ponds. Influenced by the recent surge of interest in English gardens, however, my view gradually changed, and I formed the impression that the characteristic feature of most English gardens is, in fact, that they are decorated with flowers. On the other hand, in Japan, many traditional gardens have been created using the technique of replicating scenes of nature. Both English and Japanese gardens incorporate masterful works based on a theme of “natural beauty”. In order to shed further light on these, I went on a tour of gardens in London and other parts of southern England. The purpose of this report is to provide deeper knowledge of the history and management of, and the land use and plant use employed in, the gardens, parks, and botanical gardens that I visited, and to impart my impressions of them to readers.

【Keywords】English-style garden, natural scenery, flower bed, big tree, vista

1 はじめに

イギリス庭園は、大地に広がる自然の風景を活かしていることから、日本庭園の自然を縮景にした作庭技法とは共通点が多く、かねてより関心を持ち、昨年の夏季休暇を利用してイギリスを訪問した。

訪問地はロンドンとイギリス南部であった。平成21年8月26日に関西新空港を発ち、韓国インチョン空港を経由して、ロンドン、ヒースロー空港に到着。庭園・公園・植物園など16箇所をレンタカーで巡った。走行距離は2000kmを超え、そのなかから印象深い庭園・史跡・植物園を紹介する。なお、本報告は、筆者が現地を見た、あるがままの姿を読者に伝えることを目的にしているこ

とから、場の印象を拙文と写真で説明する手法をとる。

2 イギリス式庭園とは

イギリス庭園は、建築に付随した造形的なデザインのイタリア式庭園、あるいはベルサイユ宮殿に代表される幾何学的なデザインのフランス式庭園とは異なり、美しいイギリスの自然風景が庭園のなかに造り出されている。

起伏のある大地に森・林・芝生などが広がる風景が庭園のなかに表現されている。ゆえに、このイギリス式庭園はしばしばイギリス風景式庭園、あるいは単に風景式庭園とも称されている⁽¹⁾。

一方日本庭園は、平城京跡の東院庭園にみる大海に荒

礎を再現した風景や、大徳寺大仙院にみる深山幽谷から流れ出た溪流が大河となり、やがて大海に至るという自然の縮図を再現している。筆者はイギリス庭園と日本庭園はデザインの手法は異なるものの、何れも自然をテーマにしていることから、思想的には相通じるものが多いと捉えている。

3 自然の美しさの賛美

庭園のなかに自然風景の美しさを取り入れようという動きは特に18世紀になると強くなっていく。それは造園家ではなくジャーナリストであった。したがって、実際に造るといよりも、むしろ理念が先行しているといえる。イギリス式庭園の黎明期とは、文による主張のなかに、その萌芽が見られた。

随筆家で詩人のアディソンは、1716年に記した「スペクテーター」紙上で、庭園に関する論説を書いている。広大な自然の野原のなかでは、眺めることはなんら拘束を受けずとして、「自由」という考えを自然の賛美のなかにおいたのである。フランス式庭園が視線をピスタの方向に拘束することが念頭にあったのであろう。これらのエッセイのなかには実践的な提案はなかったが、庭園の境界を見直し、風景と庭園の美を一体にして考える試みが述べられている。そして彼自身が所有している土地に庭園を造り、その一部に不規則な植栽を行い、曲がりくねった小川を造っている。

詩人アレクサンダー・ポープ(1688~1744)は、「ガーディアン」紙でトピアリー⁽²⁾を非難している。そしてさらに整形式庭園を非難し、あるがままの自然の美しさを賛美した。しかしながらポープもアディソン同様、自身の領地で自然風の庭を造ったのだが、残念ながら整形的なデザインから脱し切れなかったようである。

造園家の主張も残されている。スティファン スウツァー(1682~1745)は著書「イコノグラフィア・レスティカ」において、庭園は視線を閉じ込めたり、広大な自然のなかで足を止めさせる壁により囲まれるべきではないと主張している。

このように、18世紀の初頭は自然風景の美しさを庭園に取り入れる主張が強くなされた。それはいわば庭園批判のなかのことであったと、伝えられている⁽¹⁾。

4 庭園

イギリス庭園の多くはナショナルトラストが経営していた。持ち主は税金の支払いなどに対応できず、ナショナルトラストが経営を引き継ぎ、維持管理、運営管理を担っていた。わが国ではナショナルトラストによる、こ

のような規模での経営事例は少ない。

訪れた日がウィークデイながら、いずれの庭園も多くの来園者で賑わっていた。視察コースはロンドンから南下してイギリス南部のブライトンを経て、イギリス海峡沿いを西に進み、セントマイケルズマウントで折り返し、ロンドンに戻るルートをとる。

4-1 スコットニー キャッスルガーデン

自然地のなかの古城に庭園が配されていた。それは、まるでおとぎ話しの絵本から抜け出たようなロマンティックな古城の景観そのものであった。面積は約560haである。1380年に建造され、1835年まで改築が繰り返された。その一部は居宅として今も利用されている。

ピクチュアレスクスタイルの代表で、絵画のような景色をみることができる。年中彩りの絶えない庭となるように様々な植物が植えられていた。古城を眼下に、春にはシャクナゲやアザレアが色鮮やかに咲き乱れ、藤がからまる古城の景観は、鏡のような湖面に写り(写真1)桃源郷のような世界をつくりだすといわれている⁽³⁾(写真2)。



写真1 湖面に写る古城⁽⁴⁾

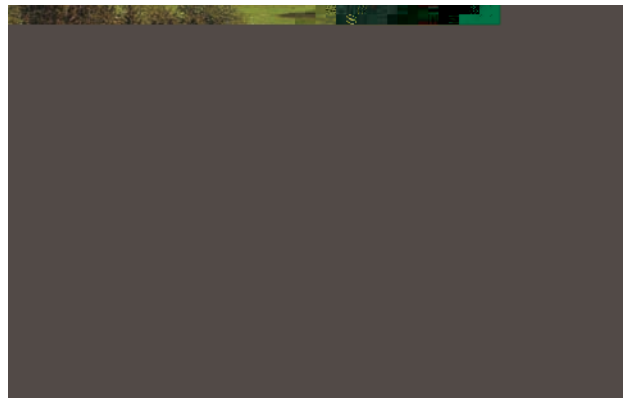


写真2 全景⁽⁴⁾

古城に付帯する庭園は四方をレンガの壁に囲まれ、その中心部にオブジェが配され、それを円形の芝生地が囲むように広がり、花木、草花がランダムに植えられていた。円を主体にした整形式庭園であるが、植物は群植を基本としていたことから、整形、自然が調和した景観が楽しめる（写真3）。

また、古城の周辺には寄植え花壇が配され（写真4）、壁面にはつる性植物が可憐な花をつけ（写真5）、



写真3 中心に Well Head を配した古城の前庭

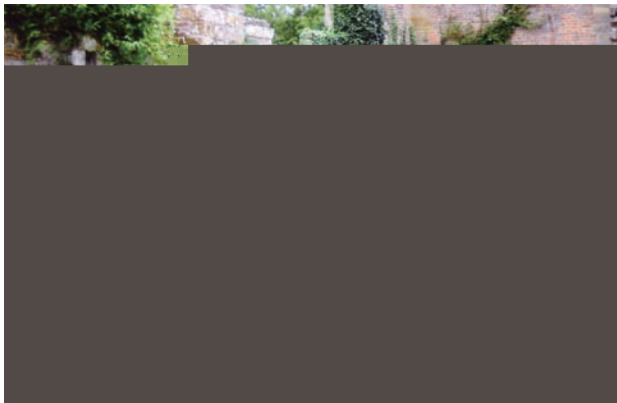


写真4 古城周りの景観



写真5 外壁の修景

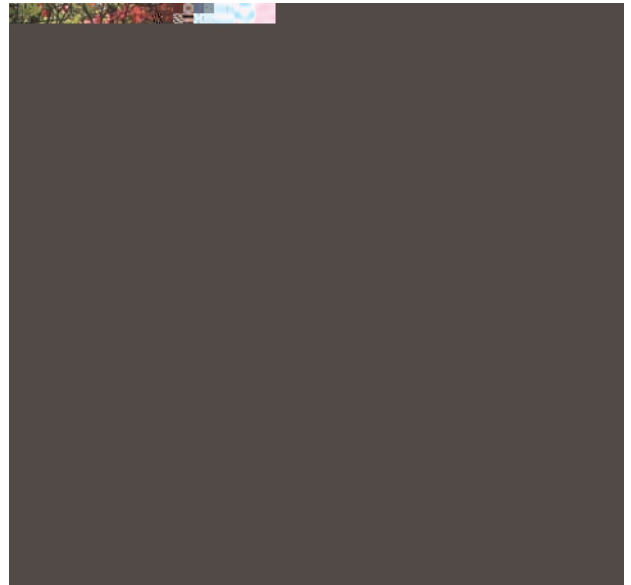


写真6 階段周りの修景⁽⁴⁾

Quarry ガーデンの自然林をつなぐ階段周りの植栽もシダや草花が細かく配され、来園者の視線をひきつける（写真6）。

4 2 ウェイクハーストプレイス

ウェイクハーストプレイスは自然林の一角に、研究施設と庭園が配されていた。研究所のファサードには湿生植物、花壇など、様々な見本園が配置され来園者を出迎えてくれる。展示は植物の生育環境を再現する生態展示の手法をとる（写真7）。

研究施設はシードバンクの機能を持ち、外側からガラス越しに研究室を見ることができた（写真8）。種子の保存、分析、活用の研究の様子が見て取れる。分野別の研究室が並び、白衣をまとった研究者が顕微鏡を覗いていた。このような研究環境を来園者にアピールしている。他国の研究の追従を許さない緊張感が伝わってくる。日



写真7 シードバンクのファサードの湿性植物園

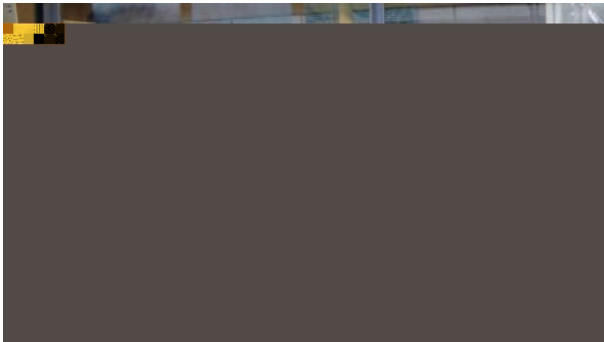


写真8 ガラス張りの研究室



写真9 求心性の高い整形式庭園



写真10 館まわりの花壇

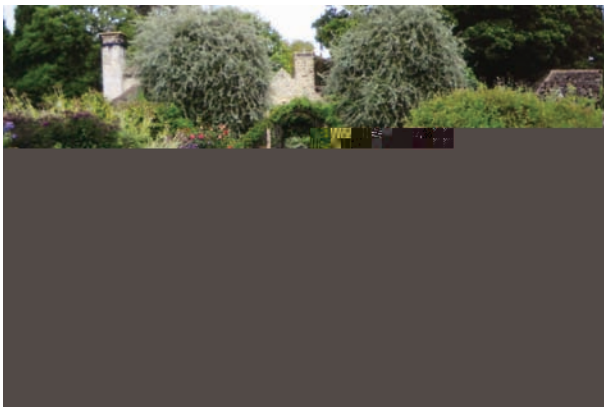


写真11 ビスタ⁽⁵⁾が通る修景花壇

本の植物園では見られない光景だ。

敷地内の一角に、生垣に囲まれた整形式庭園がある。庭園の中心には彫刻・池・広場などが配され、そこから十字型の園路が周辺に伸び、左右対称のシンプルなデザインとなっている(写真9)。

庭園に隣接して修景式の花壇が配されていた。寄植花壇である。花は一見、無造作に植えられているように見えたが、花の色、草丈の高低差、ボリューム感が不思議と調和し、思わず見とれてしまう(写真10)。また、ビスタ⁽⁵⁾が通り、左右対称の修景花壇も見所である(写真11)。

4 3 ナイマンスガーデン

ナイマンス ガーデンは1890年から整備が始まった。家屋と13種類に及ぶ庭園で構成され、面積は約240haである。残念なことは1947年に家屋が火災で焼失したことである。庭園はおよそ100年の歳月をかけて、三代のガーディナーにより造られた。

1987年の大嵐で、庭園の80%の樹木がなぎ倒されたが、管理を引き継いだナショナルトラストが傷ついた貴重な樹木を挿し木により蘇らせたのである。自然林のなかに庭園を巧みに造りこんでいる。トピアリー⁽²⁾、修景花壇などの人工的な景観が自然林に映えて美しい庭園を構成している。

幾多の困難にもめげず、素晴らしいガーデンとして守り育てたガーディナー魂に感動を覚え、英国人としての誇りを再認識するガーデンといえる⁽⁶⁾。

ナイマンスガーデンは庭園全域にテーマを持っていた。エントランスを入ると円錐形の樹形が美しいコニファー⁽⁷⁾の列植が、背後の自然林と調和していた(写真12)。ビューポイントには展望台が配され、庭園外の田園地、丘陵地の遠景観が楽しめる(写真13)。

日本庭園には石組み、燈籠などが配されているが、そこには垂直性の強いコニファー⁽⁷⁾が配され違和感を覚え



写真12 コニファー⁽⁷⁾と自然林

た。日本の伝統庭園を構成する燈籠と、西洋の植物を組み合わせた手法は明らかにミスマッチである（写真14）。

注目すべきはビスタ⁽⁵⁾が通ったウォールガーデンで、トピアリー⁽²⁾のゲートにくぐると（写真15）まるで錦絵のようなフラワーガーデンが広がっていた（写真16）。その隣にはローズガーデンのような庭園が続き、緩やかに曲がった園路沿いに植えられた、色鮮やかな花

が咲き乱れる寄植花壇があった（写真17）。林内には、年中紅葉したような葉の色が楽しめるカエデが配され、カラーリーフ⁽⁸⁾にも配慮した植栽が行われていた（写真18）。

このようにナイマズガーデンは、自然林のなかにコニファー園、フラワーガーデン、パティオと、植物の特徴を活かした庭園が巧みに作りこまれた庭園といえる。



写真13 ビューポイントの展望場



写真16 ビスタ⁽⁵⁾が通るフラワーガーデン



写真14 燈籠とコニファー⁽⁷⁾がミスマッチの日本庭園

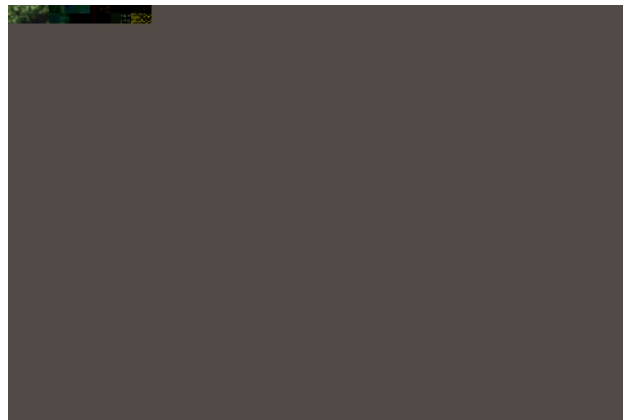


写真17 スラロームを活かした園路と花壇

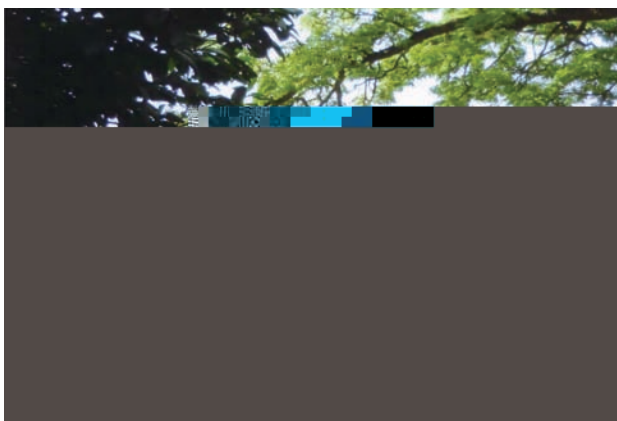


写真15 中央部にトピアリー⁽²⁾のゲートをみる



写真18 葉の色を楽しむカラーリーフ⁽⁸⁾

わが国の庭園ではあまり見かけない方法で、これも暑さをしのぐ樹芸の一つと受け止めた。

モティスフロントアビーの魅力は、広々とした芝生空間のなかに川が流れ、巨木が点在し、シンボリックな館が配された開放的な景観と、ウォールガーデン内の自然式庭園と整形形式庭園が調和した景観といえる。

4 5 ナイツヘイズコート

ナイツヘイズコートは、森のなかに佇む貴族の館そのものであった。周辺の森は常緑、落葉混交の自然林で覆われ、管理が行き届き美しい。自然林を抜けると庭園のメインゲートがあり、その周りには天をつく巨木と、広々とした草地の景観が目に入る（写真25）。ダイナミックで美しい景観に思わずため息が出る。

館は世界遺産に指定されている。外観は玄関の屋根に十字架が飾られ、切妻の屋根とレンガの外壁が、どっしりとした重量感と風格を醸し出し、歳月の積み重ねを感じた（写真26）。室内に入ると装飾、調度品の素晴らしさに貴族の生活がうかがえた。天井に届く書棚には本がびっしりと並び、そのボリュームに驚いたが、写真撮影

禁止が残念だった。

庭園は館の南側につくられていた。建物沿いに曲線状の刈り込みが配された植え込みや（写真27）、ポーター花壇が配されている（写真28）。館の中心から軸線が南に伸び、階段で地盤が下がり草地に繋がり、遠い丘陵地を見渡せ、見事な眺望景観をつくっていた（写真29）。

ここがナイツヘイズコートの見所である。階段をおりて館を振り返ると、建物のボリュームを感じ、圧倒される（写真30）。日本庭園にはない見せ方である。

ナイツヘイズコートの魅力は、自然林豊かな高台と、緩斜面の地形を活かして館を配し、ビスタが通るスペクタクルな眺望景観が楽しめるところにある。



写真24 樹木のトンネル

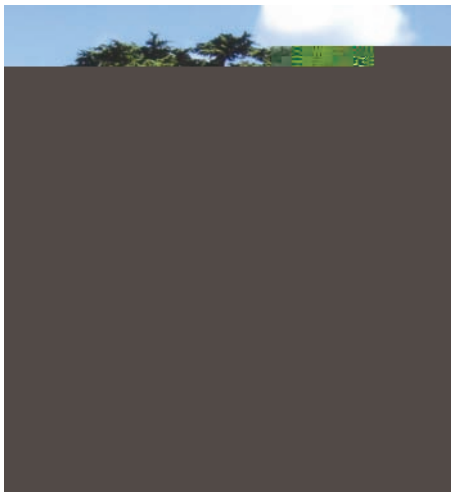


写真25 残存する巨木



写真26 世界遺産に指定された館



写真27 曲線を活かした生垣



写真28 建物の足元を彩る花壇



写真29 南側に伸びる眺望景観



写真31 周辺の樹林には世界中から樹木を集めている



写真30 高台に建つ館



写真32 館と修景花壇

4 6 キラートンハウス

キラートンハウスは丘陵地の疎林、散開林のなかにあった。林はじゅうたんを敷き詰めたような芝生に映え美しく(写真31)庭園を引き立てている。その一角にピンク色の館が位置し、色鮮やかな修景花壇がその周りを飾っていた。館と花壇が一体化した景観はメルヘンチックで、まるでおとぎの国のような印象を受けた(写真32)。建物、庭園などは1778年から建造が始まり、240年の歴史を持つ。

キラートンハウスで六つ目の訪問となり、そろそろ見る目が慣れてきた。何れも素晴らしい景観とふれあえた。ここでも、ガーディナーの献身的な管理が花壇を守っていたのである。また冷涼な気候が植物の種数を抑え、高温多湿のわが国とは違っていた。日本でみるセイタカアワダチソウ、クズなどは見なかった。

キラートンハウスの修景花壇は、一年草、多年草、宿根草、コニファー⁽⁷⁾、木本類(花灌木)などから構成され、通年、花が咲くように計画されている。また葉の色の組み合わせも美しい。カラーリーフ⁽⁸⁾のモデルがここにある。花壇のデザインは前面の花丈を抑え、後面を高くし、花壇全体に立体感をつけていた(写真33)。



写真33 寄せ植え花壇の見本

イングリッシュガーデンの真髄をみたような気がした。園芸雑誌を飾るモデルがここにある。デザインの基本は花の品種、それぞれの良さを活かしているところだ。しかも、風のそよぎ、木漏れ日を活かし、情緒感を演出している。花の種類も多く、冷涼な気候が花期を長らえていた。花、葉の色などが巧みに組み合わせられていることから、これらを一言でいうと、多様性・多変性に集約されるのではないか。雑多な感じがしないところに、ガーディナーの技がしのばれる。

庭園の出口で珍しい光景を目にした。それは草を食む羊の光景だった。草地の管理に一役買っていたのである。

癒しを感じるひとときでもあった。

キラートンハウスの魅力は建築と花をうまく組み合わせたことである。しかも羊を草地管理に組み入れ、人件費削減と資源循環を実践し、環境にも配慮していたことである。

4.7 ストアーヘッド

ストアーヘッドの庭園は18世紀に、ヘンリーホア2世により造られた。森と泉と廃墟の館が調和融合した神秘的で美しい景観は、度々「パラダイス」と称され、世界で最も美しい庭園の一つといわれている⁽⁹⁾。

敷地は1072ha、セントラルパークが三つ収まる面積である。ビジターセンターからウォールガーデンを経て、かつての作業場、使用人の住宅を利用したオフィス前を通ると、小雨に煙る幻想的な森と池の自然風景式の庭園が迎えてくれた。

その景観は、はじめに木立の間から見え、次第に広がりを見せる(写真34)。5連のアーチ橋が美しい(写真35)。庭園全体にモヤがかかり、まるで墨絵の世界を見るようであった(写真36)。池沿いにはスラロームの美しい小道が配され、巨木、疎林、花壇などとの景観とふれあえる。また所々にはパンテオン、コテージ、アポロの神殿(写真37)、フローラの神殿などの休憩施設が配され、池の眺望を楽しむことができた。

驚いたのはグロッターと呼ばれる洞窟内に彫刻物が配された施設である(写真38)。なかには小川が流れていた。そこは避暑の場として利用されたそうである。このように、小道沿いの景観は実に多様な表情を見せる。視線を遠くにやると小高い山と水面が調和した遠景観が楽しみ、視線を間近にやると、花、樹形などの近景観が楽し

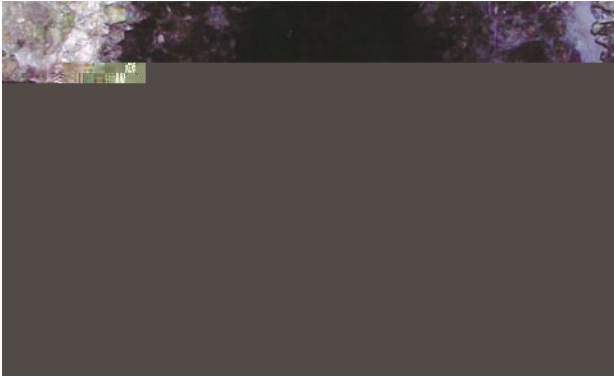


写真38 避暑用の洞窟（グロッター）

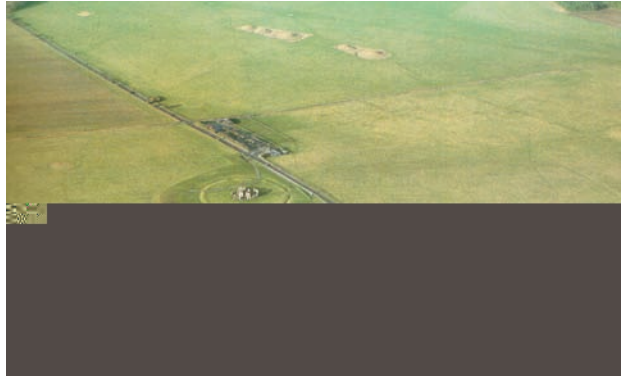


写真40 ストーンヘンジを俯瞰⁽¹⁰⁾



写真39 湿地

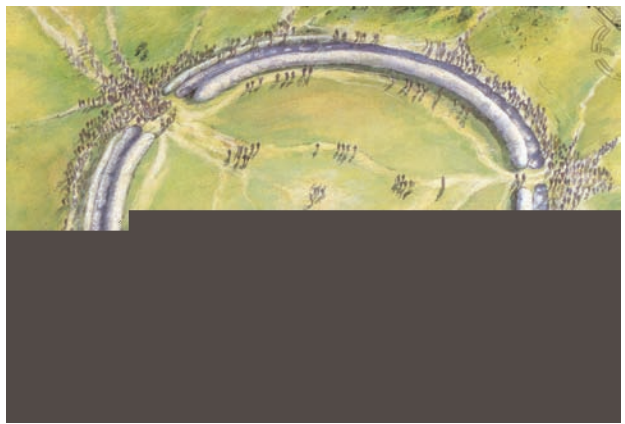


写真41 初期のストーンヘンジ⁽¹⁰⁾

4 8 ストーンヘンジ

概要

ストーンヘンジは今回の研修ツアーで最も期待していた史跡だった。ストーンヘンジは今から5000年前の新石器時代に築造された。当初は外周に土塁と堀が造られたものだけであった。その後、2500年前に木造建築物が築造されたが、それが朽ち果てると本格的な石造建築物に建て替えられ、改修と築造が繰り返され今日に至り、世界遺産に指定された。ストーンヘンジ周辺にはロビンフッツボール、カーサス、レッサーカーサスなどの遺跡が点在し、その遺跡群の面積は2600haに及び、年間観光客は85万人である（写真40）。

ストーンヘンジがいつ、誰の手により、どのように造られたのか正確に解明されておらず、考古学に大きな期待が寄せられているが、未だ解明されていない。それが魅力となっており、多くの観光客をひきつけている⁽¹⁰⁾。

初期のストーンヘンジ

初期のストーンヘンジは紀元前3000年頃に造られたものではないかと推定されている。外周は土塁と堀で造られており、正面入り口は夏至の日の出の方向に示されて

いる（写真41）。それは意図されたもので、ストーンヘンジはその頃から、太陽の運行に関連するものだったと伝えられている⁽¹⁰⁾。

木造段階

木造段階の歴史は紀元前2900年から2600年頃とあいまいだが、目的は埋葬場所であったことが明らかにされている。木造段階は周壁沿いと中心部の外周沿いに、木柱が均等間隔で配されていたと伝えられている⁽¹⁰⁾。

石造段階

石造段階は紀元前2550年から1930年にかけて造られたという。初期はウェールズのプレセリ山脈から多数のブルーストーンが運び込まれたが永続せず、その後サーセン石により馬蹄形に配置され巨大な外環が造られたと伝えられている。時代は紀元前2300年前後だったらしい。その後2280年から1600年にかけてストーンヘンジに最終的な変更が加えられ、今日に至る。

このように1000年を超える整備は、太陽のための神殿の創造といわれている。重要なのは整列線である。馬蹄形に配列された石の開口部から入り口を通過する線は、

前述したように夏至の日の出と、冬至の日没の方向を示している。この二つの時期を祝福するためにストーンヘンジがつくられたのである。

ストーンヘンジでどんな儀式が執り行われていたのかは想像の域を出ないが、列石のなかに入ることを許されたのは、ごく限られた人物だけでなかったかといわれている。ここでは、ストーンヘッジ築造という偉業に参加するために、はるばるやってきた人達も儀式に参加し、季節の移り変わりを、その目で確かめたのではないかといわれている⁽¹⁰⁾。

ストーンヘンジ以降

ストーンヘンジの最終的な築造は紀元前1600年頃に終了したといわれている。その後の利用は明らかにされていないが、農作地として利用されたようである。西暦645年ごろに一人の男性がストーンヘンジで斬首され、埋葬されたという。犯罪者として処刑されたものと伝えられている。それがきっかけに、ハンギングという言葉が用いられるようになり、それは列石が絞首台に似ているからであり、それがヘンジとなり、ストーンと合体化して、今日のストーンヘンジとなったといわれている(写真42)⁽¹⁰⁾。

それにしても、不思議な景観で神秘性を感じる。季節、朝夕の違いでストーンヘンジの表情が随分異なる。ストーンヘンジは今日、観光地となり、見学ルートには英語・日本語・フランス語・ドイツ語などによる解説を備えつけの携帯電話でサービスを受けることができる。

ストーンヘンジの歴史を聞き、思い出されたのが国営飛鳥歴史公園の石舞台地区である。ストーンヘンジに勝るとも劣らない巨石が用いられている。それをどのようにして運んだのか、恐らく丸太をコロにして大勢の人が引き、転がしながら運んだのではないかと伝えられている。ストーンヘンジも同様と聞く。

洋の東西を問わず、人間が巨石などの重たいものを運



写真42 今日のストーンヘンジ⁽¹¹⁾

ぶ方法は同じであったことを学んだが、レッカーなどの重機がない時代、人力や動物の力だけで運び、世紀の大事業を完成した先人の創意工夫に、敬意を表した次第だ。

4 9 オックスフォード大学植物園

オックスフォード大学の植物園は薬草園として開設され、約350年の歴史を持つ。

見所は柵目に区切られたグリッドパターンのデザインによる整形形式庭園である。ゲートをくぐるとビスタ⁽⁵⁾が通り、その軸線は植物園の最奥部まで通る。庭園のなかほどには円形の池と広場が配され、中心部には噴水がある(写真43)。シンメトリーな景観が続くことから、見入るように引き込まれる。

これらの外側には柵目に区画された用地にフラワーガーデン(写真44)・ロックガーデン・ハーブ園・コニファー園・薬草園などが配されていた。

見所は建築にもあった。エントランスゲートは重厚で歴史を感じた。それは周辺の歴史的建築郡との調和を意識したものと思われる。

このように、多種多様な植物が整形形式庭園として整えられ、建築と一体化したオックスフォード大学の附属植物園は、植物の魅力を修景化した庭園と歴史的建築が楽しめる、イギリスならではの植物園といえる。



写真43 ビスタ⁽⁵⁾が通るシンメトリーな景観



写真44 フラワーガーデン

4 10 アスコットハウスガーデン

アスコットハウスガーデンは、トピアリー⁽²⁾が多く、丁寧に刈り込まれた庭園の代表作といえる。

ゲートをくぐれば、しばらく美しい疎林を眺めながら、園路はピスタ⁽⁵⁾の利いた刈り込みの並木道へと続く(写真45)。やがて、白壁と格子模様の梁・柱、そして三角屋根が調和したおしゃれな館が迎えてくれる(写真46)。

整形式庭園の代表ともいえるフランス式庭園と似ているが、湿地などの自然風景式庭園を取り入れているところにイギリス庭園の特長がある。

アスコットガーデンの特徴は、樹芸の極めともいうべきトピアリー⁽²⁾や、噴水・オブジェ・花壇を巧みに組み合わせた整形式庭園と、先述したように、池に湿性植物を配した自然風景式庭園にある(写真53)。

整形式庭園は、植物を抽象的に、かつ幾何学的に刈り

込み、植物には見えないほどに形状を変えているが、これは日時計で、その周囲には日影が落ちないように、明るく保たれていた(写真47)。

また、オブジェを見ても、作者の意図していることがわかりにくく(写真48)、これがイギリスの前衛的なデザインと受け止めた次第だ。

見所は、高生垣を空間のフレームとして内側に花壇を配した広場(写真49)、カラーリーフ⁽⁸⁾を活かしたトピアリー⁽²⁾(写真50)、生垣とボーダー花壇が調和したピスタ⁽⁵⁾景観(写真51)、そしてお椀を伏せたような丸い築山に円形の池を配した庭園などがあげられる(写真52)。

後者の自然風景式庭園は、饒舌なデザインの整形式庭園を通り過ぎた場に位置しているせいか、池、植物の自然な形状をさりげなく配したシンプルなデザインに、いっそうのやすらぎ感を覚える(写真53)。庭園の配置



写真45 ピスタ⁽⁵⁾の利いた刈り込みによる並木道

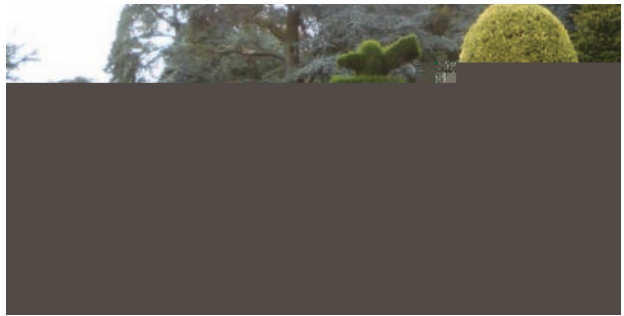


写真48 作者の意図がわかり辛いオブジェ



写真46 館の全景

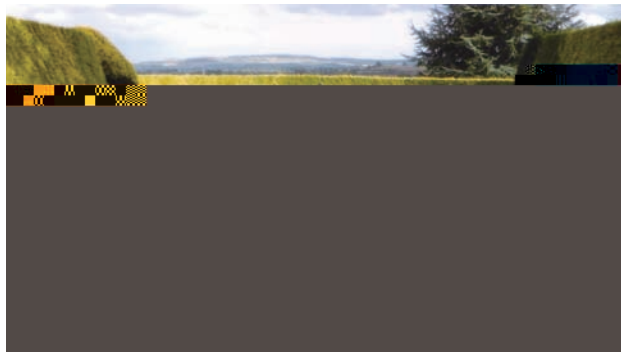


写真49 正面はヴィーナスの噴水池

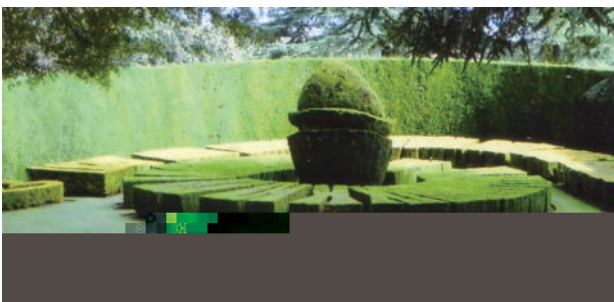


写真47 幾何学的に刈り込まれた日時計



写真50 カラーリーフ⁽⁸⁾のゲート

に人間の心理を突く方法をみた。

4 11 ケンジントンガーデンとケンジントン宮殿

ケンジントンガーデンはロンドンの中心街にあり、面積は110ha

なかに入ると360度のパノラマ景観が楽しめ、感動した。

建築のデザインは人の嗜好により決められることで、ここには規準はなく、これがイギリスの前衛的な建築デザインと受け止め、考え方を改めた次第だ。

ケンジントンガーデンのなかにケンジントン宮殿がある(写真60)。故ダイアナ妃が過した宮殿として知られている。今日ではダイアナ妃を偲び、往時の華やかな生活光景を紹介する記念館として開放され、多くの観光客で賑わっていた。

ケンジントン宮殿の中庭には、池を持つ、季節の花で飾られたサンクンガーデンがある(写真61)。また、宮

殿の2階から見下ろせる位置に円形の花壇を見ることが出来る(写真62)。いずれの庭にもダイアナ妃が好んだバラが植えられており、ここで憩いの一時を過されたのであろう。見事に宮殿の景観を引き立てていた。

そこから、まっすぐに延びた園路が見え、宮殿との境に門扉が配されている(写真63)。そこには故ダイアナ妃の写真や献花の花束が所狭しと飾られ(写真64)、冥福を祈る人が絶えない。故ダイアナ妃の人気は永遠であることを実感した。



写真57 金属板の屋根



写真60 ラウンド池から見た ケンジントン宮殿



写真58 森に浮かぶ



写真61 サンクンガーデン



写真59 売店と喫茶店

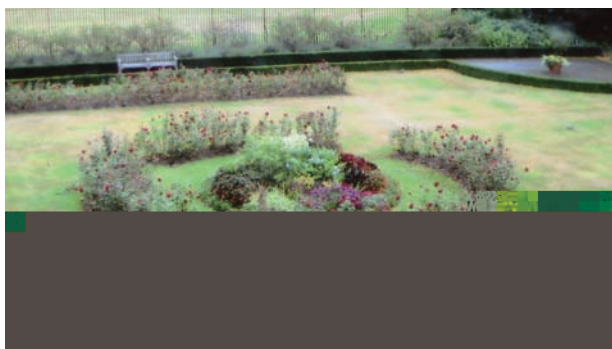


写真62 中庭



写真63 宮殿からケンジントンガーデンをみる



写真64 正面ゲートのダイアナ妃を偲ぶ花束や写真

5 おわりに

訪れてわかったことだが、日本の店頭に並んでいるイングリッシュガーデンの書籍の多くは、彩色鮮やかな花壇や、お花畑の写真で飾られていることから、このような庭園がイギリス庭園の主流かなと思っていたが、それは広大な庭園の一角に過ぎないことを確認した。

訪れたすべての庭園といていいほど、広大な敷地内に残存する森林、池、川などの自然風景のなかに館が建てられ、その中庭として、あるいは館から離れたところに壁や生垣で囲まれた空間に花壇、菜園、果樹園などが造りこまれていたのである。そこには左右対称の整形式庭園やトピアリー⁽²⁾の庭園もあり、人工的な庭園が内在していた。したがって、イギリス式庭園とは必ずしもすべてが自然風景式の庭園ではなく、現況の森、川などの自然資源をそのまま活かした広大な庭園のなかに、小面積の人工的な庭を挿入した庭園が、イギリス式庭園本来の姿といえる。

このようなことから、イギリス式庭園は森林、草原、水辺が融合調した風景が主役であるといえる。それでは、管理はどのような状況かみると、専属のガーディナーがキメ細かく作業をしていた。作業ヤードも充実していた。ゴミひとつ落ちていないことから清掃、除草が徹底しているのだろう。草地の美しさには目を見張る。

巨木のなかには、かつて植物ハンターが世界中から集めたものもあった。世界中に植民地を有した大英帝国時代の遺産であり、マルコポーロも多くの植物を持ち帰ったと聞き、その歴史は深い。巨木が多い由縁を理解した。それから、ピスタ⁽⁵⁾の利かせ方、借景の取り入れ方が注目された。並木、生垣、花壇で通景をつくり、その焦点にオブジェ、彫刻、噴水が配され、景観を楽しむ手法は、多くの庭園で用いられていた。また、展望台から庭園と外部の丘陵地を一体的に捉えた景観を借景にする手法は、日本の修学院離宮とは変わらない。遠近法による借景の巧みな技をみた。

最後に、今回のイギリス研修に参加した経緯を述べておく。イギリスは青年期にヨーロッパを訪れたとき、行きそびれた国で、かねてより訪問したい国の一つであった。折りしも昨年度、本学建築・環境デザイン学科のランドスケープ教員に採用され、「庭園の歴史」の授業を持つことになった。実はこれがイギリス行きを決断させたのである。

なぜならば、筆者は百姓高校の出身で、造園を少しかじったものの、庭園の歴史についての知見は素人に近く、庭園の本質論を理解していなかったのである。それで講義をするのは学生に申し訳なく思い、庭園の知見を深めるために急遽、奈良、京都、兵庫、鳥取、そしてイギリスの庭園見学を実施したのである。タイムリーにNPO法人国際造園研修センターから、イギリス庭園研修ツアーのお誘いを受け、同行した次第だ。

本報告は、庭園の歴史4・5講目の講義資料をリライトしたものである。資料作成におきましては、ツアーにお誘いいただき、イギリス庭園の歴史をご指導いただきましたNPO法人国際造園研修センター理事長の清水正之先生、並びに奈良平城京跡の東院庭園見学時に案内指導を賜りました、本学大学院研究科長・教授の浅川滋男先生に衷心より謝意を表します。

参考文献・語句の説明

武居二郎 尼崎博正(1998)『庭園史をあるく』昭和堂 p240、p241 242。

トピアリー：鳥・人物・幾何学模様などを表現した樹木の刈り込み物。造園用語辞典 p382 東京農業大学(1985)

小野まり(2006)『英国ナショナル・トラスト紀行』河出書房新社 p44。

The National Trust. "Scotney Castle Garden". 1966, pp. 9, 12.

ピスタ：一定方向に軸線をもった風景、および構成手法。見通し、通景、見通し景と訳される。造園用語辞典 p428 東京農業大学(1985)

The National Trust. "Naimanzu Garden- Meseru famiri no

Sumai e Yokoso". ("Welcome to Nymans Garden and the Messel Family Rooms": Japanese guidebook)

コニファー：西洋で開発された品種で、ラインゴールドのように常緑の針葉樹をいい、寄せ植えや列植に多用される。

カラーリーフ：カエデ類・ポインセチアのように、葉の色を楽しむ観葉物をいう。

The National Trust. "Stoaheddo he yokoso" (Welcome to Stourhead)

English Heritage. "Sutonhennji" (Stonehenge) 2005, pp. 5,

33 40.

Picture postcards purchased Locally

お読みいただきまして、ありがとうございます。ご感想、ご意見がございましたら望外の幸せです。

Mail:nak-fumi@kankyo-u.ac.jp

(受付日2010年1月21日 受理日2010年2月24日)